

# 『一条摂政御集』1番歌について・続考

堤 和博

はじめに

前稿「『一条摂政御集』部分的小考四題」の「一 「とよかげ」の部のI段、特に1番歌について」<sup>(1)</sup>で『一条摂政御集』1番歌を取り上げた。女の返歌2番歌とともに掲げておく。これが序文も含めた「とよかげ」の部I段（注1参照）の全文でもある。

おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかゝりけるとき、女のもとにいひやりけるとどもをかきあつめたるなり。おほやけごとさわがしうて、「をかし」とおもひけることどもありけれど、わすれなどして、のちにみれば、ことにもあ

らずぞありける。いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど、しつきをへてかへりごとをせざりければ、「まけじ」とおもひていひける。

あはれともいふべき人はおもほえでみのいたづらになりぬべきかな（1番）

女、からうじてこたみぞ

なにごともおもひしらずはあるべきをまたはあはれとたれかいふべき（2番）

はやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうのわかい人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし<sup>(2)</sup>。

前稿では他の伊尹の歌と比べて、またひいては他の同時代歌と比べて、1番歌に技巧がない

点に注目し、そんな歌が「とよかげ」の部の冒頭に置かれた意味について論じた。本稿では、伊尹の頃までの1番歌の類似歌を探ることで、1番歌のような発想の歌の源流はどこにあるのか、またその源流を受けたどのような流れの中に1番歌はあるのか、1番歌の位置づけを試みる。加えて、その結果をもとに、1番歌が「とよかげ」の部の冒頭にある意義についても若干の補足をしておきたい。

最初に1番歌の意味から押さえておかななくてはならないが、詞書後書部分をどう解釈すればよいのか、特に1番歌詞書部分は明らかに「とよかげ」の部全体の序文として書き始められており、どこからを1番歌に関わらせて解釈すればよいのかという問題からして見解が分かれている。<sup>(3)</sup> 1番歌と関わる範囲で結論を大きく分ければ、とよかげが懸想し始めてから数年間これまでとよかげは一度も返事を貰えていなくて2番歌が初めての返歌ととるか、とよかげと女はかつて関係をもっていたのだが女に愛想づかしをされて数年間返事を貰えていなくて2番歌は久々に貰えた返歌ととるかである。どちらにとるかで微妙に1番歌の意味にも影響してくるかと思うが、大枠は以下のごとくに把握しておけ

ばよいのではないか。

- (a) 男は女から返事を貰えない。
- (a1) 今まで一度も女からの返事はない。
- (a2) かつて返事はあったが数年間愛想づかしされている。
- (b) (a)の状況下自分を「あはれ」と言ってくれる人は誰もいないと男は思っている。
- (c) (b)から敷衍して「男が「あはれ」と言つて欲しいのは相手の女である。<sup>(4)</sup>
- (d) そんな状況のもとで男は死にそうだと言っている。

大枠以上のように把握して、1番歌と類似性のある先行歌または同時代歌を探ってみた。ところで、1段の焦点は、1番歌によって、初めてにせよ、数年ぶりにせよ、女から返歌を得られたところにある。それで、詞書部分を含めて1番歌の意味合いを纏めると(a)については右に示したごとくになるのである。しかし、1番歌の類似歌を探すとみると、返歌を得られたかどうかというところまで類似した状況のものは、ほとんど見つからない。そこで1番歌の状況をもう少し広く捉えて、(a)については次のように

置き換えて類似歌を探っていく。

(a) 男は女に愛されていない。

(a1) 今まで関係はない。  
(a2) かつて関係があったが数年間愛想づかしされている。

類似歌を探すにあたっては、各歌句の類同性に注目した。その結果を初句「あはれ」と下句「みのいたづらになりぬべきかな」についてのみ以下に示す。他の歌句にも注目して類似歌を探ってみたが、特に注意すべきものは見つからなかったからである。<sup>(6)</sup>  
なお、以下様々な歌集名や番号が出てくるので、問題の伊尹の歌を、「『御集』1番歌」と呼ぶ。

一 初句「あはれ」

早く『万葉集』に山道で死んだ旅人を哀れむ上宮聖徳皇子の歌(巻三・418番(旧415番))や、月・黄葉・時鳥などの自然物を「あはれ」と詠む歌(巻七・1085番(旧1081番))西本願寺本訓、同1413番(旧1409番)、巻十八・4113番(旧4089番)家

持歌など)などがあり、後代に受け継がれていく。特に家持の時鳥を詠んだ歌が後世に与えた影響は大きい。また、ちようど伊尹と同時代頃から神が人を「あはれ」と思うなどの詠み方も出てくる(『増基法師集』54番など)。このように「あはれ」を詠み込む歌は当然多彩に展開するのだが、本稿では恋に関係する歌に絞る、まずは広く見ておく。

恋の歌に的を絞れば、詠み手が異性を「あはれ」と思っているに恋しているというのが最も素直な詠み方になるであろう。そう思って探してみると、女が男を思っているものが早く『万葉集』巻十二・「悲別歌」・321番(旧319番)(『拾遺集』巻十五・恋五・926番「題しらす」人まろ、「古今六帖」第三・「なみ」・1958番、「夫木抄」第二十三・雑部五・「あはぢしま、淡路」

「人麿」・10558番)に見られた。  
住吉乃 崖尔向有 淡路嶋 何怜登君乎  
不言日者无

すみのえの きしにむかへる あはぢしま  
あはれときみを いはぬひはなし

緒一・2599番(旧2594番)(『古今六帖』第二・「と」1373番)に見られる。

ユカスワレ 来跡可夜門 不閑 何怜吾妹子  
待筒在

ゆかぬわを こむとかよるも かどささず

あはれわぎもこ まちつつあるらむ

ただしこの歌では、自分を慕いつつ待っている  
であろう女を男がかわいそうに思っているの  
あり、<sup>3211</sup> 3211番の感情などはやや異なる。<sup>(8)</sup>

男の歌で普通に女を恋しく思うのは、『古今  
集』第三期に入って巻十一・恋一・474番（『新  
撰和歌』第四・恋雑・218番、『古今六帖』第三  
・「なみ」・1955番）に見られる。<sup>(9)</sup>

（題しらず） （在原元方）

立帰りあはれとぞ思ふよそにても人に心を  
おきつ白浪

当然以後も同様の歌は詠み継がれてゆくが以  
下は省略し、<sup>(10)</sup> 『御集』1番歌とより類似性のあ  
る歌に目を移したい。『御集』1番歌は先に(a)  
と(d)に纏めた特徴をもち、男が女を素直に「あ  
はれ」と思っている意味で「あはれ」が使われ  
ているのではない。相手が自分を「あはれ」と  
思っただけかと思ってくれないと言っている  
わけ、今見た素直な歌に比べれば「あはれ」  
の使い方にいわば捻りが加えられている。では  
素直に異性を恋しく思っている以外の歌、しか

も『御集』1番歌の特徴に照らし合わせて何ら  
かの点で類似性のある歌には如何なる歌がある  
のか、古いものから探っていくことにする。

そうすると、左様な歌は『万葉集』には見当  
たらず、『古今集』でも第一、二期にはなく、  
『古今集』第三期になってから現れるのである。

即ち、巻十二・恋二・602番（『拾遺集』巻十三  
・恋三・793番、『古今六帖』第五・「あひおも  
はぬ」・「みつね」・2624番、『忠岑集』55番）の忠  
岑歌が最も古いと思われる。

（題しらず） （ただみね）

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人  
もあはれとや見む

(a)、それも『古今集』の配列からすると(a)、そ  
れに(c)との類似が読み取れる歌である。ただし、  
死に言及していないので(d)の要素はない。また、  
何とか女の気を引きたいために非現実的な手段  
をもちだしているのは古今的な設定で、『御集』  
1番歌が備えていない要素である。共通点相違  
点総合すれば、この歌の状況をもう少し進める  
と、女に「あはれ」と思われる手段には言及せ  
ずに死に言及する『御集』1番歌の絶望的な状  
況になるのではないかと想定される。そんな  
歌である。『御集』1番歌の源流を探るとする

と、先に見た万葉歌などではなく、この忠岑歌あたりを求められるのではなからうか。

ちなみに、伊尹と同時代の『村上天皇御集』95番の贈答、特に96番はこの歌を本歌にしたと思われる。

ひろはたの宮す所につかはす

あふ事をはるかにみえし月かげのおぼろけにやはあはれとおもふ(95番)

御返事

月影に身をやかさましあはれてふ人の心をいかでみるべく(96番)

さて、では(d)の要素を含みながら『御集』1番歌に近いものにはどんな歌があるかという

と、やはり古いものとしては忠岑の歌があった。『忠岑集』23番(『古今六帖』第六・「せみ」・3978番、『万代集』巻十二・恋四・2552番、『玉葉集』巻十二・恋四・1624番)である。

あはれてふひとはなくともうつせみのからなるまでなかとぞおもふ

(d)に加えて(b)(c)との類似性も読み取れる歌である。(a)についても類似性はあるが、(a1)(a2)どちらに近いかは如何とも言い難い。いずれにせよ、

全体として『御集』1番歌と非常によく似た状況を詠んだ歌と思われる。ただし、死に言及す

るのに際し、『御集』1番歌では弱気な感じにするのに対し、死に向かう強固な意志が感じられるところは大きく違っている(単なる強がりだとしても)。また、空蟬の殻を比喩的に詠み込んで死を暗示する古今的な詠み振りも、『御集』1番歌とは異なっている。

忠岑と同時代の歌として承空本『貫之集』(下二三ウ)(『冷泉家時雨亭叢書承空本私家集上』(二〇〇二年八月・朝日新聞社))、『万代集』巻十・恋二・1967番、『玉葉集』巻九・恋一・1303番)の歌も挙げられる。

アヒミステワカコヒシナンイノチ□□サスカニ人ヤアハレトオモハン

(d)に加えて(a1)及び(c)も類似している。だが、(b)とは相違し、死後に「あはれ」と思われることを想定している歌である。また、『御集』1番歌同様技巧の伺えない歌である。

もう一首同時代の歌として『古今集』巻十六・哀傷・857番(『新撰和歌』第三・賀哀・176番、『古今六帖』第三・「かなしび」・2494番)も一応見ておく。

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを、いくばくもあらで女みこの身まかりにける時に、かのみこすみ

ける帳のかたびらのひもにふみをゆひ  
つれたりけるをとりて見れば、むかし  
のてにてこのうたをなむかきつれたり  
ける

かずかずに我をわすれぬものならば山の霞  
をあはれとは見よ

死後の自分に「あはれ」を掛けて欲しいと言っ  
ている歌であり、どちらかと言えば先に見た万  
葉歌などの詠み方よりも今確認した忠岑や貫之  
の歌の方に近い。しかしこの歌は女の辞世の歌  
で、男女は相思相愛であり、その点『御集』1  
番歌とは大いに状況が異なる。また、女の死と  
二人の恋愛関係とは無関係のようだ。従って、  
先に見た万葉歌とは確かに別の流れの中にある  
が、『御集』1番歌ともまた別の流れを形成する  
歌であろう。

古今時代を終え、伊尹と同時代の後撰時代に  
移りたい。ただし、『後撰集』には取り上げる  
べき歌は見当たらず、『拾遺集』卷十一・恋一  
・653 654 番の贈答のうちの贈歌になる。

をとこのよみておこせて侍りける

(よみ人しらず)

あはれともおもはじものをしらゆきのした  
にきえつつ猶もふるかな (653 番)

返し

中務

ほどもなくきえぬる雪はかひもなし身をつ  
みてこそあはれとおもはめ (654 番)

「したにきえつつ」が死にそうなくらい切ない  
ことを匂わせているだろうが、そうすると、『御  
集』1番歌とは初句が共通するなか(b)を除いて  
全体的に類似した状況になる。(a)については(a1)  
に近いが(a2)に近いかは分からない。なお、白雪  
を枕詞風に詠み込んでいるのは『御集』1番歌  
と相違する。

中務が出たので『中務集』131番(『続後撰集』  
卷十七・雑中・1140番)も見ておきたい。

人のさうしかかせけるおくに

我よりはひさしかるべきあとなれどしのば  
ぬ人はあはれとも見じ

詞書の「人」とどういふ関係か分からず恋の歌  
とも断定できない。また、「あはれ」と思われ  
ない対象が自分そのものではなく筆跡であるの  
は『御集』1番歌と相違する。が、自分が忍ば  
れないから筆跡も「あはれ」と思われたいと言  
っているわけで、結果的には大きな違いはない。  
ということ、相違点も多いが、もし恋の歌な  
ら『御集』1番歌と発想に類似点があると言え  
よう。ただ、『御集』1番歌と男女の立場が入

れ替わっているのは勿論である。

『拾遺集』にはもう一首、卷十一・恋一・686番（『拾遺抄』244番）に、明確に死と関わる伊尹と同時代人の作がある。

（題しらず）

源経基

あはれとしきみだにいはばこひわびてしな  
んいのちもをしからなくに

(a1) (a2) どちらに近いかは分からないが(a)、それに(c)との類似性が伺えるなか、死にも言及している(d)とも共通するが、命も惜しくない<sup>(1)</sup>と強く出ている点は相違する。ちなみに、『御集』1番歌は『源氏物語』で女三宮にひたぶるに言い寄る柏木の描写への影響が指摘されているが、この歌の「あはれ」に關しても小町谷照彦氏が『新日本古典文学大系拾遺和歌集』（一九九〇年一月・岩波書店）で、「かわいそうだ、いとしいというような、共感や愛情のこもった言葉を期待したもの。源氏物語の若菜下や柏木で、柏木が女三の宮に「あはれとだにのたまはせよ」と再三言っている例が、語感として近いだろう。」と指摘している。『御集』1番歌同様技巧を用いずに率直に詠んでいる点も、柏木のひたぶるな態度を想起させる要因となっているのではないか。

以上は『万葉集』・勅撰集を軸にして私家集にも目を配りながら見てきた。次にはこの他にも私家集に見られる歌を挙げておく。

まずは『順集』240番（『玉葉集』卷九・恋一・1295番）である。

あはぬこひ

哀てふことのはもこそきこえくれよそに消えなんことのかなしき

解釈は幾通りか考えられると思うが、一応「あなたに知られて死んだら」あなたの「あはれ」と言う言葉が聞こえてくるであろう。（だのに、あなたに知られないまま）よそで消えてしまうことの悲しさよ」ととっておく<sup>(1)</sup>すると、(d)に加えて(c)、それに詞書（題）を鑑みれば(a1)との類似が見られる。『御集』1番歌同様技巧は見られない。

『小大君集』62番（『新古今集』卷十三・恋三・1188番「左大將朝光」）63番64番（『拾遺集』卷十五・恋五・934番）65番にはやや特殊な状況が描かれている。

女のもとにものをだにいはんとてきたりける人、あしたに

きえかへりあるかなきかの我が身かなうらみてかへるみちしばのつゆ（62番）

かへし

あはれともくさ葉のうへやとはれましみち  
のそらにてきえなましかば(63番)

また

ひたぶるにしなばなかなかさもあらばあれ  
いきてかひなきものおもふ身は(64番)

かへし

なくなればなげのあはれもいはるるをさは  
こころみにあくがれねたま(65番)

62番や64番で男(『新古今集』1188番によると朝

光か)は死に言及するのみで、「あはれ」と言  
つてくれなくてつらいとか、「あはれ」と言っ  
て欲しいとか訴えているわけではない。対して  
小大君が63番65番で「あなたが死んだら「あは  
れ」と言いました。いっそ死ねば。」などと  
突き放して答えている。その小大君の歌の中で  
「あはれ」が用いられているわけである。

伊尹の父師輔の『九条右大臣集』34番の贈  
答も『小大君集』の状況と似ていなくもない。

おなじとの、おほ北のかたとわらはど  
ち、きこえかはしたまひける  
行きかへりみはいたづらになりぬとや命に  
かへよあはれとおもはむ(3番)

返し、をとこ

あふにだにかへばなにかはをしからむよそ  
にはしなじこころづくしに(4番)

問題は女の贈歌(3番)の方だが、肝腎の3番  
詞書が分かりにくく、かつ歌の内容にどう関わ  
るのかもはっきりしないのが残念なのだがお  
そらく、逢ってくれないあなたが所への行き帰  
りは切なくて死んでしまいそうだとでも男が告  
げた(「きこえかはし」の内容の一部にあたる)  
のに対して、小大君同様女が突き放して答えて  
いる歌だと解せよう。とすれば、「きこえかは  
したまひける」間に男が死をもちだしたこと  
なり、それは歌の中であつたとは限らない。い  
ずれにせよ、第二、三句も『御集』1番歌と類  
似しながら、伊尹の歌に対して答えている女の  
歌にも転用できそうな歌である。

『本院侍従集』の9番では、『御集』1番歌  
と同じ意味合いの歌を、伊尹の弟兼通をモデル  
とする男が本院侍従に詠み贈っている。

身を捨てて露のみともにきえぬとも哀とふ  
べき人のなきかな

(a) (d) (a) (d) すべてにおいて類似性のある歌である。  
(a)は8番までの状況からすると(a1)になる。ただ、  
歌語「露」を詠み込んでいる点は相違する。

伊尹の親兄弟の歌が続いたので、伊尹の弟高



光の出家をめぐる哀話『多武峯少将物語』の1番の高光の北の方の歌も見ておきたい。(引用は松原一義氏『多武峯少将物語校本と注釈』一九九一年二月・桜楓社)による)

あはれともおもはぬやまにきみしいらばふもとのくさのつゆとけぬべし

『御集』1番歌と男女の立場が入れ替わっているが、(d)に加えて(c)の要素が見て取れる。また、(d)については草の露を詠み込んで比喩的に表現している点は『御集』1番歌とは異なる。

ちなみに、師輔の兄実頼の『清慎公集』47番も、(d)の要素はないが男が女に思われぬ歌となっている。

女に

あはれとも思ふや君は年をへてつらきをしひて頼む我をば

二 下句「みのいたづらになりぬべきかな」

下句では「みのいたづらになり」が焦点となるが、それに準ずる表現、例えば「みはいたづらになる」等もともに見えていく。(以下、「みいたづら」表現と呼ぶ)そうすると、中に含

まれる「いたづら」は「あはれ」同様色々な意味合いをもつのであるが、「み・いたづら」表現ではほとんど死を意味するのである。従って、「み・いたづら」表現を含む歌で恋の歌は、自ずと(d)との類似性をもつものとなる。

そういう歌を古いものから順次見てゆくと、前節で検討した類似歌同様『万葉集』には見当たらず、古今時代になってから現れる。ただしこちらの方は『古今集』の第一期にある巻十一・恋一・544番(『古今六帖』第六・「夏むし」・3984番)が最も古いと思われる。

(題しらず) (読人しらず)  
夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

「思ひ」に「火」を掛けて夏虫に託して死ぬほどの恋心を詠った古今らしい歌である。この歌が後世に与えた影響は大きく、早く延喜二二(九一二)年乃至一三年の夏に行われた『陽成院歌合』は「なつむしのこひ」を題とする一題一〇番の歌合であるが、その題はこの歌を典拠にすると言われる。そして、『御集』1番歌は『信明集』64番とともに、同歌合の1番(一番左)と4番(二番右)からの影響を受けているとの指摘が平野由紀子氏『信明集注釈』(二〇〇三

年五月・貴重本刊行会)にあるので、14番と『信明集』64番をその答歌にあたる65番ととも  
に挙げておく。

『陽成院歌合』14番

いたづらにみはなるてへどなつむしのおも  
ひはえこそはなれざりけれ(1番)

こひすとてみはいたづらにならばなれわれ  
なつむしになりやしなまし(4番)

『信明集』64 65番

をとこ

人やりにあらぬことにもあらなくに身もい  
たづらに成りぬべきかな(64番)

返し

身を捨てて思ふと見しはいたづらに成るべ  
き事にかこたれもせん(65番)

『信明集』の贈答は49番から始まる中務との

贈答歌群の中<sup>(23)</sup>にあり、49 50番の内容から「かつ  
て信明と中務は文のやりとりをする仲だった  
が、何らかの事情があつてそれが途絶えたらし」

(前掲平野氏『信明集注釈』)い状況が想定さ  
れている。従つて、49 50番に至るまでの状況は、  
(a2)、それも手紙が貰えないという『御集』1番  
歌の正味の(a2)との類似性がある。しかし、49 50  
番から二人の贈答が再開するので、64 65番では

(a2)との類似性は消えている。ちなみに、「はじ  
めてのつとめて」の贈答が92番(中務歌)93番  
(信明歌)にある。また、『御集』1番歌も『信  
明集』の歌も、夏虫を詠み込んでいるわけ<sup>(24)</sup>でな  
く、技巧も見られない歌となつている。

その他の歌集からも恋の歌で「み・いたづら」  
表現を含む歌を挙げておく。『古今六帖』の例  
は「ひなどり」を詠んだ歌であるが、恋の歌に  
準じて捉えてよかろう。

『古今六帖』第六・「ひなどり」・4340番

春の野にあさなくひなのつまこふと身をい  
たづらになりけるかな

『躬恒集』33番

ひらのやま

かくてのみわがおもふひらのやまざらば身  
はいたづらになりぬべらなり

『元真集』237番

こひわびてみのいたづらになりぬともわす  
るなわれによりてとならば

さて、「み・いたづら」表現を含む歌を伊尹  
とだいたい同時代までに限つて歌集から拾つて  
くると、恋の歌では実は以上の例と前節でみた  
『九条右大臣集』3番ぐらいしか見当たらない  
った。(注17参照)すると、『御集』1番歌の

下句は和歌では珍しい部類に属すると言えそうである。そんななかで伊尹が下句を詠み込んだのは、先に触れた『陽成院歌合』の影響を受けてのことにはやはりなりそうである。そしてそのさらに源流には『古今集』<sup>544</sup>4番があるのである。それはそれで間違いないと思うが、影響と言えども一つ、物語にまで視野を拡げると、『竹取物語』の一節からの影響も受けているのではないかと気に掛かるのである。蓬萊の玉の枝を取ってくるように言われたくからもちの皇子が鍛冶匠に仕立てさせた偽物を持ち、あたかも蓬萊から命辛々取って来たやに言っただけか、や姫のもとを訪れた場面で、問題は左の引用の傍線部の皇子の歌に加えて波線部のかぐや姫の反応である。

御子のたまはく、「命をすて、かの玉の枝持ちてきたる」とて、かぐや姫に見せてまつり給へ」と言へば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に文ぞつきたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手に  
おらでたゞに歸らざらまし

これをあはれとも見でをるに、竹取の翁はしり入りていはく、「この御子に申給ひし蓬萊の玉の枝を、ひとつの所誤たずもてお

はしませり。なにをもちてとかく申べき。旅の御姿ながら、わが御家へも寄り給はずしておはしたり。はやこの皇子にあひ仕ふまつり給へ」と言ふに、物も言はで、頼杖をつきて、いみじうなげかしげに思ひたり。

今は最古の写本天正二十年本を引きたくて、同本を底本とする阪倉篤義氏『日本古典文学大系』(一九五七年一〇月・岩波書店)を引用したので、波線部のかぐや姫の反応は「あはれとも見て」となっている。大系と同様に本文をたてる注釈書も多く、特に最近はその傾向が強い。だが、ここを「あはれとも見て」とする注釈書も少なくない。<sup>(25)</sup>どちらがよいか微妙な問題なのでここで論ずる余裕はないが、伊尹が『竹取物語』を読んだとしたら、ここを「見て」と解したとしてもおかしくはない。そして、『御集』1番歌が『竹取物語』のこの部分を踏まえているとしたら、次のように解せはしまいか。

「いたづらに身はなしつとも」と言つて命をかけたくからもちの皇子の歌にかぐや姫は「あはれ」と感じ入ったが、一方私は、「あはれ」と言つてくれる人も思いつかないまま「身をいたづらに」してしまうことよ。すると、難解と言われる女の答歌(2番)も、

かぐや姫が偽物だと知らなかったように偽物の愛だとは知らなかったならば「あはれ」とも言うかもしれません。しかし、あなたの愛情は偽りのものだと分かり切っているので、誰が「あはれ」などと言うことがありましようか。

と解せるのではないか。

なお「とよかげ」の部Ⅰ段にはとよかげの若い頃の情熱的な恋が描かれているわけだが、相手の女は「とよかげにことならぬ女なりけれど」と紹介される（冒頭の引用参照）。そこにも、「相手がかぐや姫ならいざ知らず、……」という含意があるのではなかるうか。

伊尹が如何なる本文で『竹取物語』を享受したか分からないまま、敢えて妄説を掲げてみた。<sup>(26)</sup>

### まとめ

『御集』1番歌の類似歌を探ってみて分かったのは、「あはれ」に注目しても「み・いたづら」表現に注目しても、類似歌は『万葉集』にはなく、古今時代になってから現れることであった。そのような歌の源流は、「あはれ」に着目すると忠岑あたりにあるようだ。一方、「み

・いたづら」表現に着目するならば、『古今集』544番あたりにあるらしいが、それを享受した『陽成院歌合』の影響力も無視できない。また、「あはれ」に注目すると類似歌は多く挙げられるが、「み・いたづら」表現に注目して得られる類似歌は少ないことも分かった。こういうところからそれぞれ発した流れを受けて『御集』1番歌は詠まれたのである。

さて最後に、以上のことを踏まえ、前稿「『一条撰政御集』部分的小考四題」の「一 「とよかげ」の部のⅠ段、特に1番歌について」（注1参照）の結論部分に補足を加えておく。

『御集』1番歌を見ると、当時の流行に反して技巧が凝らされていない点や『古今集』で有名となった歌語や熟語の類が用いられていない面があることを前稿では重視し、「特に何の技巧もない素直な詠み振りで、（中略）ただ、遠藤氏<sup>(27)</sup>によると、「みのいたづらに」が、『古今集』1063番と「語句の位置は一致しないが、『古今集』によった可能性があるものとして」と言っているところが、本稿での検討で『御集』1番歌の類似歌で同様に技巧等が見られない例が、承空本『貫之集』をはじめ『拾遺集』686番、『順集』

240番、『信明集』64番などにもあるのが分かった。とすれば、『御集』1番歌の技巧のなさを強調し過ぎるのは適当でないようにも思える。しかし一方で、『御集』1番歌の源流とも思える『古今集』602番も同544番も、ともに古今歌らしい歌であった。以後の歌を見ても、『拾遺集』653番、『本院侍従集』9番、『多武峯少将物語』1番など、それぞれに技巧が凝らされていた。『躬恒集』33番は近江の比良の山を詠み込んだ物名歌である。また、『竹取物語』のくらもちの皇子の歌も、「身」は「実」との懸詞で「枝」の縁語になっている。言うまでもないが、『御集』1番歌の類似歌であつても、技巧を凝らすうと思えばできたはずである。伊尹がそのような歌を多数詠んでいたのも、前稿で確認しておいた。それを考えると、『御集』1番歌を敢えて「とよかげ」の部の冒頭に据えたことから、「作歌に慣れていないとよかげの若かりし頃の姿、「上ずめく」ことのない見栄も捨てた恋に適進する姿が髣髴として」読み取れるという、前稿での考えを改める必要はないと考える。

ただ、技巧のなさを強調するあまり、『御集』1番歌に『古今集』などから受け継いだものがないかのように書いてしまったやにも思う

が、それは改めなくてはならない。確かに、技巧や古今歌との語句の一致に注目すればそのようにも言えるであろう。しかし、内容的には、『万葉集』にはなく『古今集』602番と544番あたりから現れた流れの両方を受け継いでいると、本稿における検討からは言えるのである。そうすると、『御集』1番歌には技巧がないにも関わらず、「歌として全くなつていないか」という意味ではなく、若者の情熱が素直に伝わり、とそうではなく、若者の情熱が素直に伝わり、という意味では少なくともそれなりの歌にはなっている」と前稿で述べた点を補強できるであろう。『御集』1番歌はやはり『古今集』からの流れを受けける中で詠まれたのであり、だからこそ歌としての形をなしているのである。前稿でも触れたように、『御集』1番歌は後代になつて評価される。特に、古今的世界を目指しながら『古今集』程には理知的に走ろうとしなかつた公任に評価されたのは、宜なるかなである。

#### 【注】

(1) 『言語文化研究徳島大学総合科学部』11  
 ・二〇〇四年二月所収。なお、『一条摂政御集』のうち冒頭四一首で構成されている物語的部分を、仮託の主人公名「とよかげ」

に因んで「とよかげ」の部と私に呼んでい  
る。さらに、「とよかげ」の部はとよかげ  
の相手の女によって八つの段に分けられる  
が、前稿ではそれをI、VIII段としておいた。

(2) 『一条摂政御集』からの引用は孤本益田  
家旧蔵本により私に句読点・濁点等を付し  
たが、益田家旧蔵本につき私が実際に見た  
のは、一九三七年松かけ会発行の複製本の  
一九五八年再版本である。その際、益田家  
旧蔵本はかなり読みづらい字体であるの  
で、『私家集大成中古I』（一九七三年一  
月・明治書院）・『新編国歌大観第三巻』  
（一九八五年五月・角川書店）・平安文学  
輪読会『一条摂政御集注釈』（一九六七年  
一月・塙書房）等の翻刻を参考にした。

(3) この問題に関する私見は、「『一条摂政  
御集』論——とよかげ」の部の特質——（『詞  
林』2・一九八七年一月）で述べてある。

(4) 例えば『百首要解』（大坪利絹氏編『百  
人一首注釈書叢刊19百首異見・百首要解』  
（一九九九年一〇月・和泉書院））に、「わ  
か恋死ぬを、あはれともいふへき人ハ、そ  
の女なるを、今ハつれなくあふ事もなけれ  
ハ、われ死ぬともなにともおもほえてある

へし」とある。

(5) 第三句「おもほえて」は伊尹の頃までは  
用例の少ない句で、『古今集』には巻七・  
賀・351番に一首だけある（『興風集』14番）。

さだやすのみこのきさいの宮の五  
十の賀たてまつりける御屏風に、  
さくらの花のちるしたに人の花見  
たるかたかけるをよめる

ふちはらのおきかせ

いたづらにすぐす月日はおもほえて花  
見てくらす春ぞすくなき

用例の少ないなかで『古今集』に一首だけ、  
しかも有力歌人興風の用例があるので、影  
響を考えなくてはならないかもしれない。  
しかし、この歌の第三句は、意識されない  
でというぐらゐの意で、『一条摂政御集』  
1番歌の、存在すると思えないという意と  
は相違する。恋の歌でもないし、影響があ  
るとしても取り立てるべきほどのものか微  
妙である。ちなみに、『興風集』では第三  
句「おほかれど」であり、『古今集』諸本  
でもそのようになっていた本もある（久曾  
神昇氏『古今和歌集成立論資料編』（上）  
一九六〇年三月、中—同九月、下—同一二

月・風間書房)による)。なお、『古今集』  
351番とは「いたづらに」も共通しているが、  
こちらは位置も意味も相違する。また、「お  
もほえず」の形だと意味的に類似するもの  
が『古今集』卷十八・雑下・975番にある。  
今更にとふべき人もおもほえずやへむ  
ぐらしてかどさせりてへ

(6) 『一条撰政御集』を除く歌集・歌合から  
の引用・歌番号は、特に断らない限り『新  
編国歌大観』による。私家集で第三卷と第  
七卷ともに所収されている場合は、便宜上  
第三卷によった。なお、歌集名は『古今集』  
『古今六帖』など「和歌」を省いた形を用  
いる。注(5)も同じ。

(7) 『歌ことば歌枕大辞典』(一九九九年五  
月・角川書店)の「あはれ」の項(渡部泰  
明氏執筆)の冒頭を引くと「心の底からの  
感動を表す言葉。感動詞・名詞・形容動詞  
として用いられる。」と説明されているよ  
うに、「あはれ」は様々な品詞に用いられ  
るが、本稿では品詞の違いには拘らない。  
(8) 「かわいそう」の意になりそうなのは  
卷四・相聞・764番(旧761番)にも見られる。  
対となっている763番(旧760番)とともに挙

げておく。

大伴坂上郎女従<sub>二</sub>竹田庄<sub>一</sub>贈<sub>二</sub>賜女子

大嬢<sub>一</sub>歌二首

打渡<sub>ヲワタス</sub> 竹田<sub>タケタ</sub>之<sub>ノ</sub>原<sub>ハラ</sub>尔<sub>ニ</sub> 鳴鶴<sub>ナカク</sub>之<sub>ノ</sub> 間<sub>マ</sub>無<sub>ナク</sub>時<sub>トキ</sub>

無<sub>ナク</sub> 吾<sub>ワガ</sub>恋<sub>コイ</sub>良<sub>ラ</sub>久<sub>ク</sub>波<sub>ハ</sub>(763番)

うちわたす たけたのはらに なくた  
づの まなくときなし あがこふらく

は 早河<sub>ハヤカハ</sub>之<sub>ノ</sub>(ヘガ) 湍<sub>セ</sub>尔<sub>ニ</sub>居<sub>イル</sub>鳥<sub>トリ</sub>之<sub>ノ</sub> 縁<sub>ヨシ</sub>乎<sub>ハ</sub>奈<sub>ナ</sub>弥<sub>ミ</sub>

念<sub>オモヒ</sub>而<sub>シテ</sub>有<sub>アリ</sub>師<sub>シ</sub> 吾<sub>ワガ</sub>兒<sub>コ</sub>羽<sub>ハ</sub>裳<sub>モ</sub>何<sub>ナニ</sub>怜<sub>アハレ</sub>(764番)

はやかはの せにゐるとりの よしを  
なみ おもひてありし あがこほもあ  
はれ

764番だけを見ると母が娘を普通に思ってい  
る歌にみえるが、763番と合わせ詠むと、伊  
藤博氏が『萬葉集釋注二<sub>卷第三</sub>』(一九九六  
年二月・集英社)で言う通り、「子を案じ  
る心を恋歌の形に託している」(傍点は引  
用者)歌と分かる。ただし、同じく伊藤氏  
が「竹田の庄の実景を序に持ちこみながら、  
(略)娘の姿や心に思いを馳せて悲しんで  
いる。」と言うように、「あはれ」には「か  
わいそう」などの訳があたるであろう。

(9) 第一期の卷十七・雑上・867番(『古今六

帖』第五・「むらさき」・350番)も、男が女を恋しく思っているらしい歌である。

(題しらず) (よみ人しらず)  
紫のひともとゆゑにむさしの草はみ  
ながらあはれとぞ見る

ただしこの歌はおそらく男の歌(乃至は男の立場での歌)であろうと思われる程度で断定はできない。また、相手だけでなくその縁者皆が恋しいというもので、『古今集』でも雑上に収録されていて普通の恋歌とは異なる。また、同じく雑上の873番(『新撰和歌』第四・恋雑・349番、『古今六帖』第五・「たま」・3187番)も純粋に恋の歌ではないが、一応男が女を思っている歌として挙げておく。

五せちのあしたにかむざしのたま  
のおちたりけるを見て、たがなら  
むととぶらひてよめる

河原の左のおほいまうちぎみ  
ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさ  
らばなべてやあはれとおもはむ

(10) 男が女を思う典型的な例として『篁集』17番の篁歌も挙げられる。

あはれとは君ばかりをぞおもふらむや

るかたもなき心とをしれ

しかし『篁集』の成立を考えると、これは篁の真作と認められないであろうし、創られた時期も平安中期まで下ると思われる。

(11) 『古今集』第二期に近い頃の歌としては『寛平御集』22番(『続後撰集』卷十三・恋三・852番)がある。

監命婦のまゐらせける

あはれてふひともやあるとむさしの  
くさとだにこそおふべかりけれ

このまま解すると、『古今集』867番(注9参照)を本歌としながら、(b)(c)などの特徴を備えた男女の立場が入れ替わった歌であるようだ。しかし、この歌には『大和物語』第三十二段に源宗于が宇多天皇に贈った歌となつてゐる異伝があり、そちらの方が話として整つてゐるなど、監命婦が宇多天皇に贈つた歌とみるには問題が多い。『大和物語』では恋の歌ではないので、ここでは考察の対象から外しておく。詳しくは柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』(一九八一年二月・武蔵野書院)参照。

(12) この歌は『新編国歌大観第三卷』(注2参照)(底本・陽明文庫本)第五・恋・678



番（『古今六帖』第四・「ぎふの思」・2144番）  
では次のようになっている。

あひみずてわが恋ひしなん命をもさす  
がに人やつらしと思はん

この形では「あはれ」が出てこないが、発想的には相違はないと思う。

(13) 『小町集』91番（『続後撰集』卷十八・雑下・1228番、『万代集』卷十八・雑五・3504番）は他人詠が後補された部分にあるのだが、『古今集』857番と同発想の歌と言えるので、参考のために挙げておく。

はかなくて雲と成りぬる物ならばかす  
まん空をあはれとはみよ

(14) 沼田純子氏「一条撰政謙徳公の歌一首あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな」

（『叙説』12・一九八六年三月）。鈴木日出男氏「『源氏物語』の和歌的方法」（『古代和歌史論』一九九〇年一〇月・東京大学出版会）。鈴木宏子氏「柏木の物語と引歌」（『国語と国文学』69巻6号・一九九二年六月）。後、『古今和歌集表現論』（二〇〇〇年一二月・笠間書院）に所収。

(15) 下句を「またで消えなん露のかなしさ」とする岩佐美代子氏『玉葉和歌集全注釈中

卷』（一九九六年六月・笠間書院）の通釈を参考にした。

(16) ここで示した解釈は木船重昭氏『師輔集清慎公集注釈』（一九九〇年五月・大学堂書店）と大筋同じである。一方、出光美術館所蔵本を底本に「ゆきかへり身はいたづらになりぬれどいのちにかへよあはれとおもはむ」と本文をたてる片桐洋一氏他『小野宮殿実頼集九条殿師輔集全釈』（二〇〇二年一二月・風間書房）は、「手紙のやりとりだけをしているだけで、私は死んでしまいたいようになりましたが、あなたは命と引きかえてでも逢いに来て下さい。そうすれば（あなたの気持ち）身にしみて感じられるでしょう。」（括弧内原文）と訳している。これなら死にそうだとやっているのは女の方になる。

(17) 『御集』1番歌は、第一節で検討している「あはれ」を含む歌の流れと第二節で検討する「み・いたづら」表現を含む歌の流れの両方を受けた形になっている。その点、『九条右大臣集』3番の第二、三句も「み・いたづら」表現で死を意味していて、『御集』1番歌同様両方の流れを受けた歌と言

える。ところが、この『九条右大臣集』3番以外、他に同様の例はなかった。女の歌ではあるが、唯一の類似例が伊尹の父師輔の家集にあるのは非常に興味深い。しかし、本文に揺れがあり詞書の解釈もむずかしく、これ以上の詳しい検討は他日を期す。

(18) 『小野宮殿集』(『冷泉家時雨亭叢書平安私家集六』一九九九年二月・朝日新聞社)八才にも。

(19) ちなみに、『日本国語大辞典第二版①』(二〇〇〇年一二月・小学館)では「いたずらになす」で「②(多く「身をいたずらになす」の形で用いる)死なせる。または、生きていても仕方がないような状態に陥らせる。破滅させる。」として、後で引用する『古今集』544番などを用例として挙げている。一方、死を意味しない「み・いたずら」表現としては、『大和物語』第二十一段の「監の命婦」の歌(『続古今集』卷十二・恋二・1126番、『万代集』卷十一・恋三・2265番)があつた。自分が年老いても見捨てないで欲しいと良少将に訴えかける歌である。(引用は高橋正治氏『新編日本古典文学全集』へ一九九四年一二月・小学館)

による)

柏木のもりの下草老いぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

また参考までに、「身」を詠み込まず死を意味するものでもない「いたづらになる」の初出は『古今集』卷十九・雑体・1001番と思われる。『御集』1番歌との類似性乃至影響関係はほとんど伺えない歌ではあるが、「あはれ」も含まれるので掲げておく。

題しらず よみ人しらず

あふことの まれなるいろに おもひ  
そめ わが身はつねに あまぐもの  
はるる時なく ふじのねの もえつつ  
とはに おもへども あふことかたし  
なにしかも 人をうらみむ わたつ  
みの おきをふかめて おもひてし  
おもひはいまは いたづらに なりぬ  
べらなり ゆく水の たゆる時なく  
かくなわに おもひみだれて ふるゆ  
きの けなばけぬべく おもへども  
えぶの身なれば なほやまず おもひ  
はふかし あしひきの 山した水の  
こがくたはむ たぎつ心を たれにかも  
あひかたはむ いろにいでは 人

しりぬべみ すみぞめの ゆふべにな  
れば ひとりゐて あはれあはれと  
なげきあまり せむすべなみに には  
にいでて たちやすらへば しろたへ  
の 衣のそでに おくつゆの けなば  
けぬべく おもへども なほなげかれ  
ぬ はるがすみ よそにも人に あは  
むとおもへば

(20) 恋歌以外で、『斎宮女御集』178番がある。

おなじ内侍、とりのこをかがみの  
はこのふたにいでて、はこどりと  
なむいふときこえたる、かしこけ  
ればかへしつかはすとて

はこどりの身をいたづらになしはてて  
あかづかなしき物をこそ思へ

傍線部は『新編国歌大観』と同じく西本願寺本を底本とする『私家集大成中古I』（注2参照）「斎宮女御II」では「たるかしに」と翻刻されている。『西本願寺本三十六人家集五』（一九七一年五月・墨水書房）で確認したところ、『新編国歌大観』の翻刻の方が正しいようだ。だが、歌意を考慮すると元の形は『私家集大成』の翻刻と同じで、漢字・読点・濁点を付けると「たるが、

死に」という意味ではなかつたかと考える。なお、『私家集大成』によると、小島切では「たるかしに」である。また、『後撰集』巻十五・雑一・1124番は恋の歌ではなくしかも死を意味しない例である。その贈歌の1123番とともに挙げておく。

小野好古朝臣、にしのかにのうて  
のつかひにまかりて二年といふと  
し、四位にはかならずまかりなる  
べかりけるを、さもあらずなりに  
ければ、かかる事にしもさされに  
ける事のやすからぬよしをうれへ  
おくりて侍りけるふみの、返事の  
うらにかきつけてつかはしける

源公忠朝臣

玉匣ふたとせあはぬ君がみをあけなが  
らやはあらむと思ひし（12番）

返し 小野好古朝臣

あけながら年ふることは玉匣身のいた  
づらになればなりけり（12番）

(21) 藤岡忠美氏執筆『新編国歌大観第五巻』

（一九八七年四月・角川書店）解題参照。

(22) 平野氏『信明集注釈』が「贈歌は、死んでしまひそうだと切なさを訴える時「身も

いたづらになりぬべきかな」と言った。これに対し、返歌は「いたづらに成るべき事」と意味をわざとずらし、「無益に終わる事」と二人の恋の行末の破綻の意とした。さらに、贈歌が「人やり」ではなく「われから」の恋と表明しているのに、返歌は、「かこたれもせん」と、責められる側に立つ形とした。このように巧みに女の返歌においては、男の贈歌の意図をそらすのである。」と説明するように、65番の「いたづらに成る」は死を意味するものではない。

(23) 資経本『中務集』(四四ウ・四五オ) (『冷泉家時雨亭叢書資経本私家集二』(二〇〇一年六月・朝日新聞社)にも載る。

おとこ

人やりにおもふことにもあらなくに身  
もいたづらになりぬへきかな

かへし

み□□□、やみぬとみはやいたづらに  
なり□□□□そたれもおしまん

(24) ちなみに、資経本『源信明集』(『冷泉家時雨亭叢書資経本私家集二』(注23参照))は同贈答の前に『御集』1番歌を載せる(一一オ)。これは、「(64番の)下

の句が一条摂政の「あはれとも」の歌の下句(引用略)と酷似するので、参考として一条摂政の歌を後人が上欄に注記しておいたものが、転写間に本行化したのである。」(樋口芳麻呂氏執筆冷泉家時雨亭叢書解題、括弧内は引用者補)と思われる。

(25) 例えば同じく天正二十年本を底本とする三谷栄一氏『鑑賞日本古典文学第6巻』(一九七五年六月・角川書店)では波線部が「これをあはれとも見て居るに」とされている。

(26) 物語と言えば、『伊勢物語』第二十四段末尾との類似性が『勢語臆断』・『百人一首うひまなび』等に指摘されている。

(27) 遠藤由紀氏「『一条摂政御集』研究―藤原伊尹の和歌―」(北海道教育大学札幌分校国文学第二研究室『国文学研究叢書7和歌と説話文学篇II』・一九九一年五月)

(28) 卷十九・誹諧

(題しらず) よみ人しらず

なにをして身のいたづらにおいぬらむ  
年のおもはむ事ぞやさしき

この歌は本稿で言う「み・いたづら」表現にはあたらないし、意味も違うので、『御集』1番歌に与えた影響はないであろう。